

久保栄没後六〇年記念 「林檎園日記」上演、演出にあたって

北翔大学教育文化学部客員教授

北翔大学北方圏学術情報センターポルト

舞台芸術研究グループ研究員

森 一生

一 はじめに

かつては札幌市内を広く見下ろすことができた平岸天神山の丘に、二つの文学碑がある。

一つは、石川啄木の歌碑「石狩の都の外の 君が家 林檎の花の散りてやあらん」であり、もう一つは、久保栄の『林檎園日記』の第二幕・(安倍林檎園の娘)道子が語る五月二十四日、六月六日、一日の日記を刻んだ碑である。

その碑には、「今日くらいがもう満開で、乳色に薄紅をぼかした花が五輪ずつかたまって咲く梢から、甘酸っぱい匂いがしてきて、そこいらいっぱいになるのを嗅ぐと、どういうわけか、子供の頃、百人掘りに沿って山の湖水のほうへ通っていたガタ馬車のあのピポー、ピポーと鳴らして通る笛の音が思い出されて―(略)―」と刻まれており、北海道の春を見事に表現している。

明治の中頃、札幌・平岸は、「二八〇余町歩、量産二十五万箱を数う林檎の一大産地であった」。―その林檎園を舞台に、没落してゆく戦時下の果樹園経営者とその家族の生き方を描いたのが『林檎園日記』である。

人は、その中に埋没するにせよ、反抗するにせよ、時

代の環境から逃れるわけにはいかない。そうした意味で、人にとつて(時代)環境は常に『所与』(＝受身)である。そしてまた、時の流れに踏みとどまろうとする時、人も樹木も節々(ふしふし)は「瘤(こぶ)」となり、傷痕(きず)となつてその痕跡を残さずにはいられない。それは絶間ない自然の猛威と闘った人と樹々の歴史を物語るその『あかし』だといつていいだろう。『林檎園日記』は作者・久保栄のそんな思いが込められた秀作である。

私は、二〇〇四年四月、それまでの高校教師(国語科担当)部活動・演劇部担当から(現在の)北翔大学で『舞台芸術』(戯曲研究)「演出論」「舞台芸術概論」等を担当することとなった。また、年に数回「市民講座」(北海道の風土と文学・北海道の演劇作品を読む)なる講座も担当することとなった。

二〇〇六年七月二十七日・二十八日、「劇団・東京演劇アソシエーション」は、『林檎園日記』(広渡常敏演出)を札幌で公演した。その折、私は、その公演の「観る会・実行委員長」を務めた。公演の広報のため、地元の新聞社を訪ねた私に、記者は、「いまさら、久保栄でもないでしよ

う。「と言いつつ、それでも、「久保栄の戯曲 再評価の動き」現代社会の問題 鮮明に描写」なる拙稿を書かせてくれた。(二〇〇六年七月一二日)

この時の「いまさら、久保栄でもないでしょう。」と言う記者の言葉は、私にとつて地域の、学校教育の、文化伝承のあり方を改めて考える契機となった。

## 二 文化の継承ということ (戯曲を読むこと 作家に触れること)

人はどのような時代状況の中でどんな体験をしたか、それは、人のあり方にとつて、とても重い条件を付与する。さらに言えば、どんな意識を持つてその状況に對したのか。その体験を通してどのような自己認識を形成していったのが、その人間の生き方にとつて決定的な道筋を敷設するといつてもいいだろう。

私は、かつて、久保栄にかかわる人々、(研究者、先輩たちや仲間たち)と、この第二幕で語られる林檎の花が咲く北国の初夏の一日、この碑の前で『林檎園日記』(第二幕)を朗読する会のお世話を(吉井よう子氏、故澤田誠一氏等と)していたことがある。その時から、この作品を「戯曲」作品として「精読」して(できれば立体化し、上演して)みたいと思つていた。

二〇一二年、北海道立文学館で『特別展 戦後北海道の演劇展』が開催された。その折、北海道立文学館には、約一〇〇点に及ぶ久保栄に関係する資料があるが、その資料の中から、いくつかを選定し、公開する仕事を担当することとなった。その後また、「道立文学館の宝物」ひとこと・モノ語り」なる(久保に関する)

文章(「北海道新聞」夕刊二〇一五年二月一二日より四回掲載)を書く機会が与えられた。これらの経験から私は、久保栄をもつと知りたい。と思うようになったばかりか、北海道に住む私たち、道民にもつと知つてほしいと思うようになった。

七〇数年前、一九四〇年(昭和十五年)久保栄は、村山知義・滝沢修・八田元夫ら演劇関係者(約一〇〇人)とともに、「治安維持法違反」で検挙され、新協劇団・新築地劇団・テアトロ社は解散させられた。(いわゆる「新劇事件」である。)

この時、久保は、約一年半にも及ぶ「取調べ」「拘束」を受け、官憲から「手記」なるものを何度も何度も書かされ、「巣鴨拘留所」に送られる。その獄中で七句と歌二首を書いている。

編笠をぬげば遙けし夏の雲  
笠越しの眼を笠越しに見て涼し  
碗もつて明く戸を待つや今朝の秋  
朝寒や見守られつつ尿(いばり)する  
手錠から先のわが手の凍るほど  
ゆるされて爪切りいそぐ冬日向  
行く年の壁をたたいて叫びたし

うすれゆく視力におびえ差し入れの魚の眼玉  
をつかみ喰らへる  
眼が見えずなる日を想ひ獨房にそつと按摩の  
真似もして見ぬ

これらの句・歌を目の当たりにした時、私は、井上理恵（よしえ）氏のいう

「体験は、体験しなかつた人と出会い、語られ、討論されることによつて、はじめて体験者にとつても非体験者にとつても、真に体験として生き始める」（『ドラマ解説』井上理恵 社会評論社、二四四頁）という言葉を想起した。

つまり、久保栄のこの句や歌は、二一世紀の現代社会に生きる私達や未来に生きる子どもたちに、（日中戦争に突入する）当時の、久保の生々しい、壮絶な（獄中）体験を実にリアルな体験として、（『日本国憲法』（第九条）改憲や日本の立憲主義、国民主権が国民に問われている現在の）私たちに与えてくれたことになるのではないだろうか。そして、戦争が肯定され、推進されていた時代に生きた人々の体験と出会う機会を、（七〇数年後の）今、私たちに（実にリアルなかたちとして）与えてくれているのではないか。と思つたのである。

さて、二〇〇四年一月三〇日。新宿書店から『火山灰地』久保栄が出版された。この出版によつて、日本の新劇の名作『火山灰地』を二一世紀に生きる私達は、かろうじて読むことが出来る。

その巻末には、編集に携わり、年譜・解題・解説を書いた井上理恵氏の論考が掲載されている。その解説で井上氏は、『火山灰地』を『いま』読み直す——戯曲を読む、古典作品を読みなおす——この意義について次のように言っている。

「（現代社会で）若者が抱える将来への不安は『雨宮徹』が表現しているし、彼が引き起こしたレイプ事件の解決方法への疑問や問題提起はもちろん、若い娘の結婚観や恋愛観を探ったり、炭焼きや農民の行動から労働の意味を考えることも出来る。私たちはなんとなく働いているが、働くということとは自らの生命の維持と再生産につながるわけだから、それを考え直すチャンスにもなる。そして現在は何ゆえ労働運動が下火であるのか、組合とは、反体制運動とは何なのか、現在の市民運動とはどう違うのか——等々、視野を広げるのもいいだろう。権力（学問と体制の癒着）との闘いを挑む『雨宮（聡）』の姿から、学問とは何か、科学とは何か、権力とは何かを検討せざるを得ないところに発展すれば題材は十二分に活用されたことになる。地主への仕返しを企てる『駒井ツタ』の姿は、女性が社会で生きることを再度考えさせるものとなるはずであるし、戦争と若者の命の交換の問題、これは現在全世界の人々が直面している重大問題だ。だからこそ『火山灰地』を通じて『我が事として考えられれば』すばらしいことだ。（略）」と云う。

また、『火山灰地』を読み直すことによつて、『芸術作品を享受する新しい方法を考え出すことだ。それが新しい世紀に生きる人々に手渡された久保栄からの宿題であるかもしれない。『火山灰地』が新しい世紀を生きる人々に命を吹き込まれて再生することを願っている」と云う。（新宿書房『火山灰地』四〇八頁、四〇九頁）

前記した様に、『林檎園日記』は、一九四〇年八月に「治安維持法違反」で検挙され、拘留、観察処分に処せられ

た久保栄の「大東亜理念に対する私の無力なレジスタンスの記念品の一つ」（『林檎園日記』のあとがき）でもある。その「戯曲」に込められた久保栄の『思い』を、出来ればその『核心』を、「戯曲」を「戯曲」として読み取り、立体化（上演）する中で探りたいと思うのである。

### 三 久保栄と『林檎園日記』（その構想と執筆について・戦時下の久保）

① 『林檎園日記』は、戦時中にへ構想され、少しずつへ執筆された。と言われている。つまり、戦中完成説とも言える見解が、長い間、取られて来たのである。

それは、『林檎園日記』（角川文庫版）の巻末に収載されている『林檎園日記』を書くまでの中で（久保の）「ある日は『林檎園日記』のある日は『小山内薫』の下書きを、それももう二年越し絶対安静のままで臥している吉田隆子の看病をしながら、すこしづつ書いていったのだ」という文言を根拠にしていると思われる。

だが、はたして、当時の久保にとつて、物理的にも精神的にもそれが可能であったのだろうか。——このことをまず探求してみたい。

「治安維持法違反」で検挙され、約一年半にも及ぶ「取調べ」「拘束」を受け、官憲から「手記」なるものを何度も何度も書かされ、「巣鴨拘置所」に送られたことは前述したが、当時、久保が置かれていた状況について『林檎園日記』（角川文庫版）の巻末に収載されている『林檎園日記』を書くまで」を精読しながら、他の資料（日記など）をも加味させ、当時の久保の置かれた状況をも

う少し考察してみたいと思う。

久保は、同書で「太平洋戦争の開始を獄中で知った時の気持ち」を、私は忘れることは出来ません。」と書き、「伝染病にかかり、一時、避病院<sup>△△△</sup>に、はひつてゐた

りしたため、仲間より調べが遅れて私の予審が始まったのは、（一九四一年）二月の六日でしたが、（略）一日置いた八日の朝、（略）調べ室に出て間もなく、東條首相の演説が一時半にあるから、全員ラジオの前に集まるやうにと、廷丁が予審判事に伝へに来て、仮下げ（裁判を中断し、自分の部屋にいったん戻ること）となり、司法官特有の表情をした人たちが、流れを作って廊下を一つ方向へ向かふなかを、護衛のついた編笠姿の自分だけが肩をすぼめながら逆に歩いて階下の房において、（略）午後、呼び出されて、宣戦布告のあったことと、裁判の結果が予測をゆるさなくなったことを聞かされ、（略）帰り着いた獨房の闇の中で、へかういふ烈しい転換のなかに立つ個人の力の小ささを、どうしても自嘲したくなる気もちと私は闘つてゐたのでした」と書いている。

また、さらに戦争が烈しくなり、それに従つて、久保等に対する「監視の目」も一段と厳しさを増し、「東京空襲からミッドウエー海戦、第一次第二次ソロモン沖の海戦の頃、われわれの第一審が行なはれ、村山（知義）が六年、千田（是也）と僕が五年といった工合の厳しい求刑があつて、これに松尾（哲次）と中村（栄二）の加はつた五人だけが第二審に残り、あとは執行猶予になる

といふやうな中で」「ともかく、『フアウスト』(ママ)の翻訳を終えて本屋に届け、幸ひに許可番号も取れたのですが、印刷の都合などで手間取ってゐるうちに今度は出版社のほうで解散を命じられ、てしまふ状況が(日常生活に)現出し、

「秋からはB29が東京の空にも来るようになり、——何しろ寝たきりの病人を抱えてゐますので、朝起きるといつサイレンが鳴ってもいいやうに、きちんと防空服装を整へて机に向かうのですが、それでも東京の西南部からねらはれる時などは、警報が出て病人に手当てをしてやり、避難の身支度をさせているうちに、もう砲弾が聞こえ出す——」と、(一日をまともに送ることさえまま成らない状況を)書いている。

更に、(首都・東京の空襲が激しくなると)東京保護観察所から「戦局も益々緊迫(略)敵機の皇土を侵すことすでに数回に及び(略)身近に爆弾落下するやも知らざれる状態、被害の模様(略)立ち退きなどがある場合、立退き先、至急一報被下度候」なる(表面上は「心配」を装い、内実は「厳密な監視」である)文書を(再三)受け取り、その状況の報告を、度々催促される日常生活である。

一九四四(昭和一九)年八月には、保護観察所長・栗谷四郎より、宇治山田市(宇治橋畔、神都道場)で開催される(二泊三日に及ぶ)「聖地思想鍊成講習会」の(強制的参加の)お知らせなどを受け取っているが、それは(同じく「治安維持法」で検査された演劇関係者の)「村

山知義、他九名の連名」で「この度、私共の為に《思想鍊成会》を開いて頂くことになりました。——この度も一人の欠席者もなく全員打揃つて是非参加致したく存じます。——久保殿(も)——」との(出席参加を要請する)強要ともとれる・「仲間」からの)文書も添付されている始末である。

その主旨は「芸能文化部門の従事者に対し、皇国史観に基づく思想鍊成を実施し、国体と日本精神に徹し芸能に負荷せられたる国家使命の達成に粉骨挺身せしめんとする」ために、である。(北海道立文学館 久保栄資料 KS1047 参照)

② 当時の一般市民が置かれた状況を理解するために目を転じてみたいと思う。

哲学者・古在由重(こざいよししげ)は、一九四四年の元旦の日記に「世界をあげての大戦争のさなかにおける新年の初めだ。家々には旗が掲げられてはいるけれども、人の足音もきこえず、世間はひっそりしずまりかえっている。このあたらしい年、世界には大きな変動が起こり、日本もまた内外ともにあわただしさを加えるだろう。この身、家族の上に何事がおこるかかわからない。」と記している。

「太平洋戦争は三年目を迎え、空に海に、そして陸に、手ひどい敗北をいくたびも重ね、事態は手のつけられないほどに悪化していた。国民生活の窮乏は目に余るほどである。

物資は政府の管理下に入っていたが、絶対量が少ないために、配給制度がしかれ、衣料が切符制になったのは、

一九四二年二月一日からで、年齢・性別・職業の別なく、都市では一人当たり年間一〇〇点、郡部では八〇点。その点数の範囲内で、衣料生活を賄うことが国民一人一人の義務となった。背広上下五〇点、ワイシャツが一二点、パンツ四点、靴下二点、作業服が二四点、一〇〇点では日用品を手に入れることなどかなわぬ相談である。(一般庶民は)「欲しがりません、勝つまでは」「足らぬ足らぬは工夫が足らぬ」の標語を絶えず口にしながら——である。」

〔東京〕都民が腹をすかしながらも三度の食事をとれたのも前年一〇月までで、この時から主食はもとより、肉も野菜も魚も、嗜好品も、すべてが配給制になり、とたんに店頭から消えた。配給は隣組組織によって行われ、隣組による一括購入、隣組長の許可のいる配給通帳制、国民生活の中の下部組織の目が急に光はじめ、流通機構が少数の人によって握られたため、かえって物資の偏在は深刻になった。

一方日本の官憲は、あらゆる反政府・反軍の考え方を、反戦または厭戦の表われとして弾圧をし、《厳しい監視下に置き、日常行動すら容易ではなくなり、戦争の真実を語るなど到底許されることなく、「造言飛語」(憲兵隊)あるいは「不穩言動」(警察)の用語のもと、言論は統制され厳しく摘発された。》(憲兵資料部の資料によれば)「憲兵隊は、民間の隣組や翼賛壮年団の中に「憲兵連絡者」という名の「協力者」を組織し、徹底的に反戦反軍の言論を圧迫したという。昭和十九年の一年間に、憲兵隊が不法言動として扱ったもの、六二三三三件に及び、理由なくしてとらわれたものは数知れないと

いっている。《親しい隣のものがいっせ密告者に変わるか》、《誰もが誰をも信じられなくなっていた。》のである。」

〔原爆が落ちた日〕半島一利・湯川豊 P H P 文庫  
七四、七五、一〇六、一〇七、一一三頁)

こうした中で久保栄は、「おのづと胸に浮かんできたのは、何とかして筆をよこさずに、ここ何年かの嵐をやりすぎさう。しかも、その期間を、仕事のうえで空白にすまいといふ、ただ一つの願ひでした。」と書き、また「当時の情勢からすると、今度書くものが或は絶筆になるかもしれないというふうには考えられませんでした」と書いている(『林檎園日記』角川文庫 復刻版)『林檎園日記』を書くまで「一八二、一八三頁)

こういう状況の中で、(であったから当然)久保は、「一番手がつけやすくもあつた『ファウスト』第一部の台本を推敲し、訳し残した部分を補って本にまとめる仕事」と『小山内薫』を執筆する。(『林檎園日記』も同時に書いていたということになる。)

『林檎園日記』に絞って考察してみよう。

久保は、「(敗戦の日)この日までに『小山内薫』のはうは、最期の一章を残して、ほぼ定稿が出来上がっていた」と書いている。それに対して、『林檎園』は不完全な下書きをよそに預けたままになっておりました。といふのは、《状勢がここに来る以前》に、《反ナチや厭戦を主題の一部とするやうな》戯曲を、《セリフの隅々までかつちり書ききる》ことも出来かねましたし、《うっか

り手元に置いておくと、何かのときに証拠品にされさうであった》りしするからなのですが、——（略）と書いています。

久保の死後（一九五八年・昭和三十三年）、村山知義は座談会等で、「久保は（すべてにおいて）『臆病だった』』と言っている。それに対し、羽仁五郎や武谷三男や星野芳郎などは「細心の人」といい「周到な人」といい「慎重だった」という。

私（森）は、冒頭で、埋没するにせよ、反抗するにせよ、（人は）その時代の環境から逃れるわけにはいかない。そうした意味で、人にとって（時代）環境は常に『所与』である。

と述べた。久保栄が「臆病だった」のか、「細心だった」「周到だったのか」のか、あるいは「慎重だったのか」は、時代の環境が、ことさら、そのようにさせていたといふべきだろうことは、肯けるはずである。

それはともあれ、前述の様な状況の中で、「手元に置いておく」と、証拠品にされさうな「原稿を《託す人》、厳しい監視体制（＝「拘留中」は他人との接見が禁止され、書類授受の禁止。その後も「思想犯保護観察法」第三条により保護観察処分を受け——厳しい監視のもとにあった久保にとつて）人と《会うこと》もままならぬ時、（原稿を）《託す行動》が本当に取れたのであろうか。——このように、久保が置かれた当時の生活の諸事情・状況を加味して考察してみると、従来言われてきた（『林檎園日記』の）「戦中完成説」とも言える見解を私（森）も、疑って見る必要を感じてしまふのである。

③ さて、久保は『林檎園日記』初演当時（一九四七年・昭和二十年）の「プログラム」に、次のようなことを書いています。

「太平洋戦争になって間もない四一年の暮れに、（略）当分は《世に隠れてものを書く》より仕方がなささうに思へたので、家庭にも寝た切りの病人を抱へなぞして、わづかに語学力の切り売りで、その日を凌ぎながら戯曲、ロマン、評論、翻訳、など、手におよぶ範囲の仕事の計画を進めたなかの一つが、この作であったのである。後日にそなえる意味では、私の場合、戯曲から先に仕上げるとよかつたのだからが、戦争の結果についても、まだおほよその見当しかつかないうちに、《かういふ性質の作品を、セリフの隅々までかつちり書きまきすることは出来にくかつたし》、第一、書くにしたがつて、草稿を他の場所に移して置くといふやふな配慮も必要だったので、終戦の時には、ファウスト第一部の改訳や小山内薫の評伝がほぼ出来上がってゐたのに、肝心の戯曲が《未完成のままに残つた》のであつた」と書いています。

#### 四 『林檎園日記』初演と「不評」について

久保にとつての戦後第一作『林檎園日記』は、（演劇関係者・文化人には）「不評」であつた。いや、不評と言ふよりは「不評のうちには《葬り去られた》」と言われている。（『林檎園日記』の復権『久保栄の世界』井上理恵 社会評論社二一六頁）

大笹吉雄氏は、（初演を観劇した「久住良三」の劇評や「飯田俊一」の劇評は）『林檎園日記』が戦中に書き

つづけられ、「一応の完成を見ていたことを前提にしている。また、懸賞に応募しようとし、思い直して原稿を焼く「信胤」の姿に、久保栄の自己投影を見るのも当時からの『定評だった』と言っている。」「——だが、それらに疑問を呈し、『林檎園日記』は『戦後に書かれ』、信胤には別のモデルがあったと論じたのが井上理恵の『林檎園日記』論」（『久保栄の世界』収載）でこの論考は《か  
なりの説得力を持つている》。『作品および作家について  
も再考の余地がまだある』と述べている。

（『日本現代演劇史 昭和戦後篇Ⅰ 第二章 三越劇場の位置 二・ゼネスト中止と東芸の『林檎園日記』三一八頁より）

井上理恵氏の見解を引用したい。「〔林檎園日記〕の失敗について）かつて小宮山量平氏は敗戦という未曾有の混乱の中で『評者と作者の微妙な食いちがい』が生じたためであり、それは『作者と作品が背負った『不幸』を指し示すものであったと指摘されたが、（小宮山）氏の言われる『微妙な食いちがい』と『言う指摘の底には、既に『林檎園日記』が戦中において『一応の草稿』が出来上がっていたとみる一般的な認識がある。（略）つまり、『一九四二年の頃に『一応の草稿』が完成』され、戦後『若干の補筆改訂の上、上演されたもの』であり、そのために、戦後と言う『時代状況を背景とした観客の側の意識と戦中の久保のそれとの間には、少なからぬ断層が介在した』とされているわけである。しかし、小宮山氏が「作者と作品が背負った『不幸』を招来せしめた『原因』とし、また、当時の多くの評者が『林檎園日

記』公演『失敗の原因』とした、言わば戦中完成説にはいささか疑点が多い。（略）戦中 構想を練り、断片的に筆をとっていたものの、この作品は到底戦時下には完成されていたとはいえないからである。とはいえ、小宮山氏とは違った意味でこの作品は『不幸』であった。『作品自体に内在する問題性にはなく』、作品の公演という、『戯曲の演劇化＝舞台化過程に顕在した』外的環境に『根底から規定されていた』ところに『林檎園日記』の『不幸』があった。（略）『こと古いたかに見える』政治と芸術』をめぐる原理的な問題を、依然として提示し続けている」（小笠原克）とされるのも、このゆえであるのだが『林檎園日記』がかかえた不幸は、この作品にとどまらず、その後の久保栄の劇作家としての行程を根底から規制していくことになる。』——と。（『林檎園日記』の復権 『久保栄の世界』井上理恵 社会評論社二一六、二一七頁）

とすると、この作品が「いつ書かれたか」という問題だけではなく、作品『林檎園日記』の本質に大きくかわってくるに違いないと私（森）は思うのである。

私は、前述したように『林檎園日記』を何度か声に出して読み、リーディングし、立体化しようとしてきたが、（少し古くは、一九七三年一〇月、札幌市民劇場特別公演 久保栄文学展記念『林檎園日記』上演（演出・佐々木逸郎）の時、私（森）は『舞台監督助手（演出助手）』であった）これらの経験から私が感じたことは、人間像が実にしっかり書かれていること、人間関係が見事なこ

と、静謐な中にしつかりとしたドラマがあることなど……等々である。

誤解を恐れずに言えば、私（森）が感じた・感じていた戯曲『林檎園日記』と「戦後の《定評》Ⅱ《戦後、若干の補筆改訂の上、上演されたもの》」との間に相当大きな《差》があるのであるかと思うのである。

（山脈の会）塚本輝子は、『林檎園日記』と私——と言う文章の中で「一九七二年九月から五、六人のメンバーで毎月一回の研究会で、『林檎園日記』について（勉強会を持った。その席で）Aは言う。劇としてみた場合、それぞれの人物が典型化されていて分かりやすいと同時に《テーマが非常に今日的である》。と。またBは、当時の新劇人、左翼インテリゲンチヤーたちの酷評に対して、あえてアジプロにしないでデッサンしたその辺りの作家のモチーフを読み切るのが、当時は無理だったのではないか。——と言っている。また、『林檎園日記』は私の今まで読んだ文学作品の範ちゅうに属さない」。――（略）何度も読み返して描写の丁寧さに私は感心した。丁寧さとは、『林檎園そのもの』とそこで生活する人々の描き方《対してである。》と言っている。さらに「道子の日記も他の登場人物の会話も《センチメン스가長い》のではなからうか。」と言おう。

塚本の言うように《テーマが非常に今日的である》点や《林檎園そのもの》とそこで生活する人々の描き方《点で。また、（久保が言う）《セリフの隅々までかつちり書き》切っている点で、私には戦後になって《若干の補

筆改訂》の上、上演されたもの》とは到底思えないのである。

（道子の）日記や（登場する人物の）会話のセンチメンスが《長い》こと、《セリフの隅々までかつちり書》かれているがゆえになかなか「テキストレジー」に苦勞したことなどについては、後ほど考察したい。

「日本の知識人としての久保栄」という羽仁五郎の文章がある。（一九六一年『火山灰地』劇団「民藝」上演時のパンフレット）その中で、

「久保栄の一周忌に小平の墓地に十数人が集まったとき、滝沢修が獄中の久保栄について語った。牢獄は人の自由を奪うのみならず、そこではだれも自分を見失うのが普通であって、人間を番号で呼ぶという本来は人権をまもるための方法が逆に人権を踏みじめるものとされてきていたが、ナチスはさらにそこに人間をしてイデンテイテト<sup>△△</sup>を失わしめる方法を極端にまで利用した。そうゆう中であって、久保栄が獄中にあっても自分を見失わなかった姿が滝沢修を感動させたのであった。《獄中にあっても久保栄は久保栄であることをやめなかつた》のである。」という。

この羽仁の言葉を借りまでもなく、《獄中にあっても（戦中から敗戦、そして戦後の「新潮流」の中にあっても）久保栄は久保栄であることをやめなかつた》その作品として、私（森）は、（戦後七〇数年のいまこそ）受け止める必要があると思っているのである。

## 五 『久保栄演技論講義』と『林檎園日記』

久保栄は、その晩年、演劇創造の第一線から身を引いた。だが、「——僕（久保）は、若い君たちの中から、ひとりでもふたりでもいい、本当の役者になつてくれる人が出てくれないことには、死んでもしに切れない——」と心血を注いで「劇団民藝付属水品演劇研究所」で若い演劇人を育てた。

「芝居は生身の人間が最後まで必要だ」だから「声・ことば」は、（単に）メッセージや知識や情報を伝えるだけのものではない」「感情であり、決断であり、意志であり、生活であり、なにより人間・人格そのものだから、それを「感じとれ」。との考えから、講義では、ノートを一切取らせなかったと言う。講義中、ノートを取ろうとすると久保は「○○君、私の眼を見て——しっかりと話を聞きなさい」と、厳しく叱責したという。だから、受講する若い俳優たちは、（講義中は一切ノートを取らず、久保の語ることばや声をこころからだに記憶させ、焼き付け）講義後、喫茶店など別室に集い「久保先生は『こう言った』『いや、こうではないか』」など講義内容を反芻し、（そこで）メモやノートを改めて取り出した。そして、それを持ち寄りガリ版印刷にし、加筆・推敲し、山田善靖氏が編者代表となつて出版したのが『久保栄演技論講義』（一九七六年、三一書房。二〇〇七年久保栄死後五〇年に当たつて、影書房より再版）である。

私（森）は、（北翔大学の）「演出論」「戯曲研究」の授業で、この『久保栄演技論講義』をテキストにした。

一九五六年（昭和三二年）八月一七日、（講義の六講目・

演技実習——『林檎園日記』）には、久保は「研究所のほうからは概論をやれとの話でしたが、そのことを加味しながら、今学期は多くの作品である『林檎園日記』を取り上げ、作品研究、演出研究を同時に進めながら、実際に演技の実習に入りたい」と、『林檎園日記』をテキストにしている。

少し長くなるが、この日の講義で久保はどんなことを語つたかをもとにして久保の「思い」と作品の「モチーフ」を把握してみたい。

まず（テキストとしたかを）「僕がなぜ、ほかならぬ僕の作品について説明しておきます。僕たちが勉強のために取り上げる作品は一応『すぐれたもの』でなければなりません。そうでないと勉強にならない。かえつてマイナスになる。何事でも最初の印象が一番強いので、それが後まで残つてしまう。外国の戯曲にはすぐれた戯曲があるので、君たちが劇創造のため作品にはいつていく場合、生活、環境、時代的についても自分に近いものが比較的入りやすい。（略）生活様式のまるで違う外国ものでは、それへの理解の不十分さから、単に映画が何かで見たしぐさの物真似におちいりがちなのです。生きた喜怒哀楽を得るために、環境が変わらず、類似体験のより豊かな生活印象のはつきりしている日本人を創る方が基本的な勉強になります。また日本人を演じる場合でも、取り上げた作品につて作家の話がすぐ聞けたり、上演されたものならどのように上演されたかを演出者にたずねられるほうがなお一層いいし、難解な個所など解決できませんから——」と言ひ、

次に「僕の作品系列を時代的に見て、歴史ものでは困ります。《現代》との相違が出てくるのですね。そこで多くの作品の中でも比較的入りやすい《現代のものから》、『林檎園日記』を取り上げたのです。」と言った。

「しかし、戦争中を描いたこの作品は、現在とは時間的に言ってもわずかなへだたりであるが、このわずかなへだたりが戦後世代の君たちにとっては大変な問題になるし、また境遇的に言ってもおそらく君たちとはちがう中農を描いたものだったりするから、君たちの生活をそのまま持ち込むことはできませんよ。(略)君たちは、これから芝居創りを実際にしてゆくわけだが、生き生きとした迫力を舞台に作り上げるためには、君たちが映画を見て受ける迫力のようなものをざっくりばらんに考えているのではダメです。舞台では、生(なま)の日常臭を避けて、内的情緒を豊かにし、それを詩的にまで高め、典型化したものを作り上げなければならぬのです。」と言っている。

そして「『林檎園日記』の僕の創作上のテーマは、文化人・芸術家の戦争責任です。《このテーマを生産部面を描くことに関連を持たせながら書いていった》のだが、生産部面を取り上げたからといってリアリズムだとは言えない。いかに生産部面を取り上げて、基本なくしてリアリズムと言えないし、リアリズムを成立させません。(略)と言いつつ、

「作家が作品を書く場合、世界観、イデオロギーだけでは書けないことを前にいいましたね。それでは観念の

ぶつかり合いでしかない。また逆に感覚のみでは生活のある一部分は描けても、《社会全体への目——世界観がなくては全体のキヤッチがふくよかでなく、人物が偏ってしまふ》。(略)

「二つの作品を舞台の上に形象化するとき、《その芝居に携わる者全部の現実感覚》を束ねた芸術感覚を必要とするが、これは作家のイデオロギーではつくれないのですね。劇団アンサンブルの重要性というのは、イデオロギーを統一させて組織を保つことではなく、個々の演劇感覚を束ねた芸術感覚に統一されることを言うのです。(略)とも言っている。

さて、上記のように久保栄は「『林檎園日記』の僕の創作上のテーマは、文化人・芸術家の戦争責任です。《このテーマを生産部面を描くことに関連を持たせながら書いていった》——と演劇を志す厚い若い人たちに言いきったことは、とても重いことだと私(森)は思う。また、この日の講義だけでなく九月一日(八講目・体現の演技——身体の動き)、一〇月五日(エチュード——内的視聴覚)などでも『林檎園日記』を取り上げているが、そこで語られる(『林檎園日記』に対する)《作者(久保)としての思い》や作品に《登場する具体的人物像》《その言動》からして、戦後でなければ決して書けなかったのではないか。と思うのである。

『林檎園日記』の《作品自体に内在する問題》等についてもう少し考察したいのだが、紙数の関係で次号にまわしたい。